実践事例②

新潟県立新発田高校

英語の重点化、体系的な探究学習で「質実剛健にして未来の俊傑」を目指す

1クラス減、英語力の低迷という課題を抱えながら、2015年度入試で実績を伸ばした新潟県立新発田高校。その背景には、学習意欲や進路意識を高める初期指導、「スロースタート」を合言葉にした英語の基礎力向上、そして、低学年時から体系的に行う探究学習があった。学力向上がもたらす自信、体験から生まれる確固とした進路観は、生徒にどのような好影響をもたらしたのか。

学年のスタートに当たり学年団で課題と目標を共有

新潟県立新発田高校は県を代表する進学校の1つだ。例年約150人が国公立大に合格するが、前年度に比べて生徒が1クラス分減った2015年度も150人が国公立大に合格。国公立大進学率は前年度の35・9％から47・0％に上昇した。進路指導部長の小林等先生は、躍進の背景として、当該学年の「初期指導の徹底」「英語指導の強化」「探究学習」を挙げる。

「2008年度に公立高校の学区が全県一区になってから、地元の成績上位層の一部が新潟市内の高校を目指すようになり、本校では学力低下、中でも英語の学力低下が恒常的な課題になっていました。今までと同じ指導では生徒を伸ばせないという共通認識を学年団全員が持って指導に当たったことが、15年度入試の結果につながったのだと思います」

「初期指導の徹底」「英語指導の強化」「探究学習」の3つの施策を軸に、同学年の取り組みを見ていきたい。

14年度卒業生が入学した12年度、学年団発足に当たって行ったのは、課題と目標の共有だ。12年1月、次年度の1学年団が集まり、直近4年間の国公立大合格者数、進学率などのデータを確認し、課題を洗い出した。そして、「国公立大合格率50％以上」「難関大進学者数15人以上」「旧帝大への複数合格」といった学年目標を決め、学習や進路への早期意識付け、生活習慣の確立、学習と部活動との両立、「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）の工夫といった指導方針を打ち出した。そうして課題と目標を共有した上で、3年間を見通した教科指導、進路行事、総合学習などの指導計画を立てた。進路指導部の平野深雪先生はこう語る。

「生徒の入学前にここまで詳細にデータを分析・共有した学年団は初めてでした。本校で3年間持ち上がりを経験した先生が、学年団に複数いたから出来たことだろうと思います。1回り目の経験を基に課題を整理したことが、学年団の早めの始動につながったのではないでしょうか」

初期指導で重視したのは、生徒の学習習慣の確立と、主体的な進路選択の重要性を浸透させることだった。入学時から週1回の「学年だより」に加え、「進路だより」を発行。「今の学習時間では足りない」「語句調べなどの予習をきちんとして授業に臨

新潟県立新発田高校副校長
柳沢幸也　やなぎさわ・ゆきや
教職歴31年。同校に赴任して3年目。「本校の校是を学校一丸となって具現化する」

新潟県立新発田高校
小林　等　こばやし・ひとし
教職歴27年。同校に赴任して6年目。進路指導部長。「地道に頑張っていけば、いずれ良いことが起こる」

新潟県立新発田高校
平野深雪　ひらの・みゆき
教職歴32年。同校に赴任して8年目。進路指導部。「高校生活は生徒にとって通過点である」

新潟県立新発田高校

◎創立119年目を迎える伝統校。2013年度からスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受け、地域や大学と連携した体系的な探究学習を展開。部活動も活発で、男子テニス部や陸上部などがインターハイに出場。
◎設立　1896（明治29）年
◎形態　全日制／普通科・理数科／共学
◎生徒数　1学年約290人
◎2015年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、東京工業大、新潟大、大阪大、神戸大、新潟県立大などに150人が合格。私立大は、慶應義塾大、中央大、明治大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ356人が合格。
◎URL　http://www.shibata-h.nein.ed.jp/

もう」などと、時に厳しく、時に励ましながら、学習習慣の早期確立を促した。4月2週目に行った新入生オリエンテーションでは、高校での学習の仕方を指導すると共に、卒業生の大学生に合格体験を語ってもらい、進路意識の醸成にも努めた。

教科指導は英語に重点化「スロースタート」の船出

教科指導では、生徒たちの最大の弱点であった英語の強化を優先して行うことを学年団で決めた。12年度入学生は従来の8クラスから7クラスに減った最初の学年で、生徒の減少に伴い、成績下位層も減るのではないかという期待があった。しかし、ベネッセの1年生4月のスタディーサポートでは、成績下位層と同様に成績上位層も減っていることが分かり、GTZ（＊）のS1がゼロだった。特に英語不振の影響で、A3は全体の12%にまで落ち込んでいた。

そうした中、英語科は、生徒に英語学習の取り組み方の指導を丁寧に行うことから始め、「スロースタート」にして「高1ギャップ」と呼ばれる移行期をスムーズにした。授業をゆっくり進めながら、小テストや週末課題で中学校段階の内容を復習させ、1人も取りこぼさずに基礎・基本を定着させることをまず重視したのだ。例年、1年生の4月当初から大学入試に対応した教材や単語集を活用していたが、この学年では最初の中間考査が終わるまではそれらを活用しなかった。英語科の圓堂愛子（えんどう）先生は次のように振り返る。

「当初は本当にこの指導内容で良いのかという不安でいっぱいでした。進学校の指導としてふさわしくないのではないか、かえって入試に間に合わなくなるのではないかという迷いもありましたが、決めた以上は徹底してやり抜く覚悟で臨みました」

単に進度を落とすのではなく、基礎・基本が身に付くまで徹底して手を掛けたのもこの学年の特徴だ。中学校段階の内容を含む教材を使い、単語テスト、例文暗記テストを毎時間、週末課題から出題する週末課題テストを、毎週実施。合格点に達しない生徒には再テストを行い、課題未提出の生徒は提出してから部活動への参加を認めることとした。

「課題の定着度を意識させるため、毎週月曜に週末課題テストを行いました。課題にしっかり取り組んでいれば合格できる問題にしたので、やれば出来るという自信につながったと思います」（圓堂先生）

基礎・基本の徹底が全体の底上げにつながる

全員合格を目指す小テストは成績下位層の底上げが目的だが、全体指導にも効果的だと、圓堂先生は言う。

「生徒にしてみれば、再テストは避けたいし、部活動にも早く出たい。中位層の生徒は1回で合格したいと地道に取り組みます。上位層にとっては学習のリズムづくりに役立ち、結果的には全体に好循環が生まれました」

成績上位層には、2年生から志望校に応じて個別の添削指導を行い、定期考査では思考力・表現力を問う自由英作文を課すなどして、英語力

＊ベネッセのテストにおける共通の評価指標。「S1」～「D3」までの15段階がある。

を引き上げる指導を行った。

基礎・基本の徹底の効果は、スタディーサポートの結果にも表れた。1年生1回目の英語のGTZではB2が最も多かったが、2回目ではB1、3回目以降はA3で推移した。生徒の英語に対する自信が深まるに連れて、積極的に学習に取り組む生徒、長期休業中に洋書の読破に挑戦する生徒も現れた。丁寧にかかわる指導によって、主体的に学ぼうとする姿勢が育っていったのである。

英語の指導での成功は、他教科の指導にも波及した。

「国語や数学などの教師も、英語の指導を参考に小テストなどで基礎・基本の定着を意識するようになりました。生徒も英語でそのような指導に慣れていたので、すんなりと受け入れてくれました」（小林先生）

生徒の主体性を引き出し地域のリーダー育成を目指す

12年度入学生の指導で、最大の挑戦だったのが総合学習だ。それまでの総合学習は、夏休み前に5日間連続で大学教授の模擬講義を聞き、感想を書くという活動だった。生徒の進路意識の醸成という面で効果はあったが、講演だけでは生徒は受け身になりがちだった。

「本校には中学校時代にリーダー的な存在だった生徒が多いはずですが、入学後にどんどん受け身になっていく印象がありました。それは、私たちが生徒を動かそうとしなかったからだと思います。生徒には世界に羽ばたく人材になってほしいと思いますが、まずは新発田の発展を担う人材を育てることが本校の使命です。地域のリーダーを育てるためには、主体的に課題を発見・解決できる力や意欲を育てなければいけないと考えました」（平野先生）

総合学習の内容を構築する際、次の2点に留意した。1つは、体系的・継続的なプログラムにすること、もう1つは、生徒自身が活動し、考え、発表するというサイクルを組み込むことだ。そうして、3年間で体系的に探究学習に取り組む「未来の俊傑プラン」が始まった（図1）。

企業訪問を通して生徒独自の課題を設定

1年生でのテーマは「地域とつながる」だ。「農業・環境」「医療」「金融」などの10分野から、生徒は希望分野を選択する。分野ごとに社会人講師から「働く意味」「地域の課題」といった話を聞いた後、地元企業を訪問し、業界や行政を取り巻く課題について説明を受ける。その上で、小グループに分かれて、それぞれの分野における地域の課題とその解決方法を模索する。研究成果をグループごとに発表した後、各分野から代表の1グループによる全体発表会を行う。

企業訪問では、研究分野に直接つながる課題を出されるとは限らない。企業担当者が提示した課題の中から、生徒がそれぞれ関心のある分野に引き付けて課題を捉え直し、その課題の解決策を見いだしていく。「訪問先

図1　「未来の俊傑プラン」（2012年度入学生）

学年	テーマ	活動	目標と方策
1学年「地域を創造する」（社会の一員としての自覚・働くことの意義の理解・学習・進学の意義の明確化）	地域とつながる	「地域の俊傑」講演会	社会人による講演を通して仕事・地域社会について理解を深める。
		企業訪問	企業見学を通して仕事・地域の課題について理解を深める。
		地域の課題解決学習 地域の課題解決発表会	分野別のグループごとに地域が抱える課題を探求し、解決策を検討し、プレゼンテーションすることで、課題を明確化し、情報を収集・整理・分析し、他者と協同で発表する力を付ける。
		新聞切り抜きリレー	
2学年「学問を探究する」（世界の現状の理解・次代を担う人材としての自覚）	学問とつながる	学部・学科研究発表会	希望する学部・学科研究を通して、課題研究のテーマ設定につなげる。
		大学講義体験	大学教授による模擬講義を受講することで、分野別課題研究を深める。
		課題研究 課題研究発表会	グループごとに課題を探求し、解決策を検討し、プレゼンテーションすることで、情報を収集・整理・分析し、他者と協同で発表する力を付ける。
		課題研究小論文	グループ活動を基に、自分の意見をまとめることで、意見を客観的に構築し、論理的に表現する力を付ける。
	進路とつながる	志望理由書作成	志望理由を書いてみることで、自分の希望進路を明確にする。
		新聞切り抜きリレー	
3学年「進路を拓く」（社会貢献の意識の確立・次代を担うリーダーとなる自覚）	進路とつながる	総合講座	総合的な知力・学力の向上を目指す。
		小論文総合講座（新書ブックトーク・新聞課題解決学習）	意見を明確にし、論理的に表現することで、受験小論文の作成につなげる。
		インターンシップ（就職・公務員希望者）	新発田市主催のインターンシップ事業への参加を促す。
		新聞要約リレー	

＊学校資料を基に編集部で作成

で同じ話を聞いているにもかかわらず、課題の捉え方は生徒によって異なります。発表を聞く生徒たちも、同じ課題でも様々な捉え方と切り口があるのだと、視野を広げていました」と平野先生は語る。

2年生では「学問とつながる」をテーマに、本格的な探究学習に取り組む。学部・学科研究を行い、関心のある学問に関する大まかな知識を身に付けた上で、大学教授の模擬講義を受ける。講義は学問分野別に10講座設けられ、生徒は希望する講座を受けた後、講座の中で小グループをつくり、それぞれ研究テーマを決めて探究学習をし、1年生の時と同様に、12月に分野別発表会と全体発表会を行う。その後、グループ活動を基に個人論文を作成し、自分の意見を論理的に表現する力の育成を図るところが、2年生の活動の特徴だ。

これら2年生の探究学習は、現在、学校設定科目「ESD探究」として位置付けられ、13年度に指定を受けたスーパーサイエンスハイスクールの普通科における特徴的な取り組みとなっている。

3年生では「進路とつながる」をテーマに、ブックトークや新聞を活用した課題解決学習などを行い、受験に必要な論理的思考力向上を図る。

探究学習を通じての体験が主体的な進路意識を育む

探究学習は、生徒の進路選択に大きな影響を及ぼしている。「2年生で取り組んだ国際問題をもっと深めたい」「県庁を訪問して、国際交流に携わりたいという気持ちを強くした」など、探究学習の体験を踏まえて進路を選択する生徒が増えた。更に、「地域貢献」を自分の進路に関連付けて口にする生徒も目立つ。地域に根付いた探究学習がもたらした一定の成果といえよう。

体験を通して進路を見いだした生徒は最後まで諦めずに入試に向かう力も身に付けると、平野先生は言う。

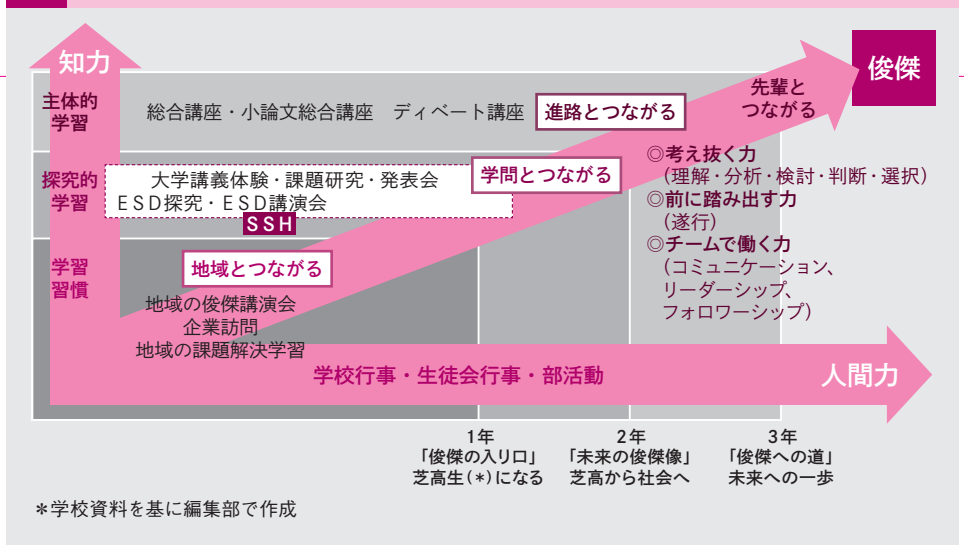
「学力があっても志望が定まっていない生徒は、少し行き詰まると『志望を変えたい』『AO入試を受けたい』というように、やすきに流れていきます。目標が明確な生徒、ぶれない軸を持った生徒は、多少つらいことがあっても最後まで頑張り抜き、大学進学後も夢を追い続けています」

柳沢幸也副校長は、今の生徒に同校が掲げる「俊傑」の片鱗（へんりん）を見ている。

「本校の校是は『質実剛健にして未来の俊傑を目指す』です。それは、学力だけではなく、教科・進路学習、部活動、行事など、あらゆる教育活動を通して高められる総合的な人間力によって実現されると考えています（図2）。3年間の体系的な探究学習を通して、学びは受験のためだけではないという意識が浸透したことが、結果的に15年度入試の実績にもつながったのだと思います」

今後の課題は、1年生の探究学習の改善だ。現在、学校設定科目となり、総合学習と連携しながらより充実を図っている2年生の「ESD探究」を深化させるために、調べ学習で終わらせない課題設定の仕方や探究の方法を模索していく考えだ。

図2　新発田高校が目指す「俊傑」の姿



＊学校資料を基に編集部で作成

＊「新発田」を略して「芝田」と書く慣例があり、その名残から同校は通称「芝高（しばこう）」と呼ばれる。